

熊本県平坦部における秋大豆不作の原因とその対策 (第 1 報)

古 谷 義 人*・久 木 井 基 二*

FURUTANI, Y. & KUKII, M. Damages of Autumn-type Soybeans caused by Insects in Kumamoto Pref. and its Control (I)

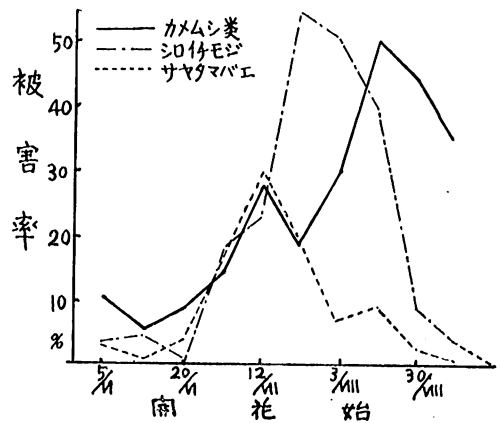
熊本県平坦部における大豆作は、ほとんど夏大豆のみにかぎられ、秋大豆の栽培は以前から不可能とされている。これが原因については、かつて松浦 (1938) は土壤水分がその主因であろうとし、小林 (1946) は軽い火山灰土では葉葉ができすぎる結果、結実不良となつて残されているが、いまだ不明確な点が多く残されていた。ところが最近になつて、緑肥または飼料としての秋大豆の栽培が多くなるにつれ、これが自家採種を望む声も強いので、当地帯における秋大豆不作の原因及びその対策について再検討を行うこととした。

著者はさきに、九州における大豆害虫の発消長をしらべ、その結果から夏大豆地帯における秋大豆の栽培は、虫害のため不可能となつている場合の多いこと、しかしまた夏大豆地帯でも、播種期をくりさげて虫害をさけるならば、ある程度秋大豆の栽培が可能であろうと推察した。それでいちおう虫害が不作の有力な原因であろうと考え、主として虫害をさけるという立場からこの問題をとりあげることにした。

まずはじめに害虫の発消長を確めることとし、さきに行つた虫害の発消長調査をひきつづき 2 年間行つた。いずれも夏大豆の金川早生を用いて播種期試験を行い、主として茨における害虫の加害率の消長をしらべた。結果は図に示すように、3 年ともほぼ同様な傾向を示し、開花始が 6 月 20 日前後より以後になると、急に害虫の加害が増し、なにかんづく秋大豆の従来の開花始である 8 月下旬では、シロイチモジマグラメイガの類及びカメムシ類の加害が著しいことをみとめた。しかし開花始が 9 月初旬以降になると、これ

らの被害もかなり減少する傾向を示した。なお 1952 年度に同一材料について、ダイズクキモグリバエの加害状況をしらべた結果は表に示すごとくで、8 月上旬以降になると本害虫の加害が著しく増加する。

以上のように、熊本県平坦部における秋大豆の栽培は、従来の慣行播種期では虫害なにかんづくカメムシ類及びシロイチモジマグラメイガの類による加害が、不作の主因となつているものと考えられるが、播種期のくりさげによつてこれらの被害を軽減でき、秋大豆の栽培もある程度可能となるのではないかと予想された。



ダイズクキモグリバエによる被害の消長 (1952)

播種期	2/V	15/V	4/VI	16/VI	3/VII	16/VII	31/VII	15/VIII
調査日	21/VII	2/VIII	13/VIII	19/VIII	4/IX	14/IX	28/IX	10/X
被害消長率%	1.7	2.3	10.2	38.7	85.5	95.2	91.7	96.5

*九州農業試験場